
大きな桜の木の下で

しんどうみずき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大きな桜の木の下で

【Nコード】

N6592K

【作者名】

しんどうみずき

【あらすじ】

卒業アルバムを作る、という役割を受けてしまった私は、春という季節のなかで卒業式を迎えるのだった。

春が来た。

「二階から春が落ちてきた」なんて気のきいたことは言えないけれど、生温かい突風が吹きすさび、桜の咲いている様をみると、冬が終わったのだと実感する。

真新しい制服をぎこちなくまとって、新しい世界に踏み出す時期にはまだ少し早い3月の下旬。無秩序に流れた卒業式の涙がようやく乾こうとしていた。

三寒四温という言い伝えのとおり、冬が舞い戻ったかのような寒い日と、うぐいすの鳴くうらかな陽気がくり返し訪れていた。

マスクをつける無表情な通行人が行きかうなか、私は空を見上げた。

今日はコートがいらないくらいに温かい。歩いているだけで額に汗が浮かびそうになる。太陽はその笑みをゆっくりと深め、地上の生き物に活力を与えていた。

「もうすぐ、か」

さくらのつぼみは初々しくて、なんだか可愛らしかった。

幼稚園生が背伸びをしているような微笑まじさがあるのだ。早く育ちたい、そんな思いはきつと一緒になのだろう。

いろんなものがはじまる季節だ。そして、いろんなものが終わった。

中学校での3年間の生活がもうすぐ幕を閉じようとしているころ、私は卒業アルバム編集に携わっていた。卒業アルバムの係 略して、卒アル係。

私はそれまで、面倒くさいという理由ですっとクラスの役割を敬

遠していた。

狭い空間のなかでも様々な役目というのは生じるらしく、クラスメイトたちはみんな何らかの係を受け持っていた。クラス委員。体育係。生き物係。そういう細かな割り振りがあったのだ。

最後の責務　卒アル係を選定するにあたって、積極的に立候補しようなんて人はもちろんいなかったから、メンバーは消去法で決められた。

なにもやっていない人。通称ニート。それが優先されるのだ。

もうすぐ定年を迎えるもうろくとした爺さんが私たちの担任だった。彼はほとんどを生徒に委託していたから、まともにかかわったのは授業中くらいのものだ。HRではプリントを持ってきて、あとは机で目をつむっている。寝ているのか、起きているのか判断付かなかったが、どちらにせよ影響力がほとんどないことには変わりなかった。

そういうわけでクラスのこととはほとんどクラス委員が仕切っていたのだ。

恒例のように真面目そうな男子と、やる気のみなぎった女子がペアだった。それぞれ名前を、高峰と北条といった。

「まだ係をやったことのない人、手をあげてください」と無駄に大きな声で北条が言った。

あれをやった、これをやったのだと、言い訳がましく呟いている同級生たちの声が聞こえた。私は黙ることしかできなくて、教壇に立っている2人となるべく視線を合わせないようにしていた。

たぶん私に決まるだろうと予感はしていた。押しつけがましい視線が集まっていたから。

「秋島さん、なにかやってたっけ？」

そんな雰囲気を読み取ったのだろう、北条が私に尋ねた。静かに首を振る。はいはい、やりますよ。

「それじゃあ、やってもらえますか？」

「はい」

「それでは、もう一人、やってくれる人は？」
なにか喋らなければいけないのだろうと、高峰が情けない声で訊いた。

どうしてこういう委員は2人ひと組なんだろう。クラス委員みたいなちぐはぐなカップルだって出来上がるのに。むしろお似合いなペアなんていないだろう。

みんなデコボコなんだ。ちょうど良く噛み合わさる人なんてそうそういない。

歯車のようにうまくはいかないのだ。

「……はい」

誰かが手をあげたらしい。

きつと私みたいにニートな人だろう。それか物好きな暇人。欲しいのは卒業アルバムであって、その過程なんてどうでもいいのだから。写真と文集と、最後のページにある寄せ書きの欄が詰め込まれていればいいのだ。誰も工場になんて興味はない。

後ろのほうから聞こえた声を頼りに振り返ると、とある男子がやる気なさそうに挙手していた。

「秋島さんと神崎君に決まりました！」と北条が嬉しそうに宣言した。

パチパチパチ、と乾いた拍手が教室に響いた。

放課後の図書室に残って勉強しようなんていう勤勉な生徒はいるはずもなく、眠たそうにしている図書委員がカウンターの内側で座っているだけだった。

丸テーブルの上に置かれた白紙のルーズリーフ。私と神崎はシャープペンを弄びながら、そこに何を書き込もうかと話し合っているのだ。

「なんかないの？」と私は言った。

「今考えてるところ」と神崎は答えた。

アルバムに掲載するおまけのようなページのテーマを何にしよう

かと考えているところだ。

それがないと、ただの味気ない文集になってしまいうらしい。だったら堅苦しくまとめた作文なんて書かなければいいのに。

ふざけていて、楽しくて、明るい作文にすればいいのだ。そのほうが青春らしい。中学生になって学んだこと、なんてたかだか原稿用紙数枚分にまとめられるのなら必要ない。自伝が出版できるくらいどっさりつつぶるべきなのだ。

「やっぱさあ、ランキングとかがいいよね」と神崎が言った。

「将来、芸能人になってそうなランキング。みたいなやつ？」と私は訊いた。

「そうそう。定番だけど、それしかないっしょ」

「でもつまらないじゃん、それ。どうせまた先生の誰かに文句言われて穏便なのしか載せてもらえないんだろっし」

いじめにつながるとか、ふさわしくないとか、そういう理由でランキングが却下されることも多い。私の小学校もそうだった。結局残ったのは、つまらないを通り越してただの飾りにすぎないページだった。

「ならどうすんのさ」と神崎が言った。

「知らない。適当なの考えてよ。面白いやつ」と私は言った。

「そうは言ってもさ」と神崎はため息をつきながら呟いた。「ないよ、そんな都合のいいやつ」

「仕方ないね。諦めよっか」

「……わかった！ みんなで一文ずつ繋げて小説を作ろう。そうすれば個性的だし、面白いのができる」

「却下。たいていグダる」

「何を作ればいいんだよ、それなら」

後ろにのけぞり、椅子の2本足でバランスをとる。こつやって後頭部から転げ落ちたやつを私は何人も見てきた。実に痛そうだった。「どうすればいいんだろっね」と私は言った。

結論どころか有力な案も浮かばないまま、私たちのささやかな会

議はお開きになった。時間だけが無意味に、そして足早に過ぎていく。

夕飯を食べ終え、部屋でのんびりとくつろいでいるとマナーモードにしておいた携帯電話が震えていた。1日を乗り切った体はベッドに横たわっていると動こうとせず、メールを確認したのはそれから30分が経ってからだった。

件名 神崎です

本文 勝手にメアド聞きました。

アイデアが1つ浮かんだので、提案してみます。

クラスで絵を描いたらどうだろう。対象は校庭にあるあの桜でいいと思うんだけど……。

卒業アルバムのことなんてすっかり忘れてリラックスしていたのに、神崎は無粋なやつだ。私のメールアドレスはだれから聞いたのだろう。教える気なんてなかったのに。

校庭にある桜。まだ咲いていないというのに、どうやって描くつもりなんだろう。

でも、と私は思う。

悪い考えじゃない。ピンク色の絵の具はどれくらい用意したらいいだろう。

「あー、昨日のメール見た？」

翌朝の教室で、神崎が私に尋ねた。そっぴや返信をしていなかった。あの後すぐに寝てしまったのだ。

「見たよ。いいんじゃない、あれで」と私は言った。

「やった」

無邪気に喜ぶ神崎の姿はまるで子供みただった。これといった

特徴のない男だからあまり関心を持っていなかったのだけれど、ちよつと印象を変えなければならぬ。

「校庭の桜だっけ？ どうやって絵にするの？」

「今ま2年も見てきたんだから大丈夫だって。それに桜なんてどれと同じようなもんだろ」と神崎が自信たっぷりに言った。

「まあ、それもそうだけど」

「そうと決まったら早速、先生のところへ行くこうぜ。ダメって言われるわけはないんだからさ」

「神崎ひとりで行ってよ。私は面倒くさいからパス」

低血圧で、どうにも朝のうちは気力がみなぎらないのだ。教室に来るまでの階段でさえ億劫になる。

「えー」と彼は言った。「一緒に行こうよ」

「なんで？」

「なんか心細いじゃん、ひとりだと」

まったく、こいつも単独でトイレに行けない連中と同じだ。それが許されるのは幼稚園までだというのに、成長するとかえって臆病になる。

私は仕方なく立ち上がった。

「今度、なんかおごつてもらおうから」

「自分だって委員のくせに」

「うるさい」と私は言って、うしろからついてくる神崎と教室を出て教員室に向かった。

先生は「いいと思う」の一言で私たちを退けると、机の上に広がる雑務に戻っていった。本当に教師としての自覚があるのだろうか。ただの役員にしか見えない。

次のHRで、私たちは素案を発表した。

賛成とも反対ともつかない姿勢で、なんとなく了承された。誰も自分の意見なんて持っていないのだ。人間っていうのは根が怠惰だから、すぐに他人に任せてしまう。かくいう私も、席についていれ

ば無表情なクラスメイト達と同じ反応を示したことだろう。

授業中はなるべくエネルギーを蓄えて、休み時間に発奮させる。学校とはそういう場所らしい。

「何か意見とがありますか？」と私は事務的に訊いた。反応なし。

「なら、卒業アルバムのページには校庭の桜の絵を入れることにします」

私の隣では神崎が神妙にうなずいていた。

それから数日ののち、また神崎からメールが届いた。なんでも絵の具が切れてしまっているらしい。私のほうも3学期の美術の授業でチューブの中身はほとんど空っぽになっていた。

たいした量を使わなくせに、いつも余分に出してしまふのだ。パレットを洗う時に、濃度の高い色水が出来上がるのは何も私だけではあるまい。

それで買い物をするようになった。どういうわけか私にもついてきてほしいと言う。

「センスが悪いと困るから」なんて理由にもなっていないような理由を盾に、なんとなく押し切られてしまった。私服で出かけるのも久しぶりだな、と思いながら私は服を選んだ。

待ち合わせは駅前で。

私が到着すると、神崎は寒そうにポケットに両手を突っ込みながら待っていた。

今日は寒い日。冬将軍が居座っているのだと、天気予報士が丁寧に説明していた。

「お待たせ」と私は声をかけた。

「よお」と彼は言った。

制服とは違って私服はずいぶんとおしゃれに気をつかう。神崎もファッショナブルにしたつもりなのだろう。ジーパンにPコートを着込んでいた。まあ及第点と言ったところかと、私は流行に鈍感なくせに品評した。

「神崎もよくこんな面倒な係引き受けたよね」と私は暖房のきいた店内で言った。

「そう？ おれはそれなりに楽しいと思うけど」と神崎が絵の具を手に取りながら言う。

「こんな課外活動みたいなこともしなくちゃいけないし、大変だよ」と私は値段を確認した。

「つまんない？」

「まあ、寒いのを除けば気晴らしくらいにはなると思う」と私は言った。「これにしよう。代金は割り勘でいいから」

ピンクと茶色の絵の具を持ち、レジに向かう。これだけだ。懐が痛むような価格じゃない。

「いいよ、おれが払うよ」と神崎は言った。「おれが誘ったんだし、これくらいなら全然高くないし」

なんだか意地になっっているみたいだ。

男の子っていうのは女子にお金を払わせたくないものなのだろうか。別にかまわないのに。

じゃあ、と私は提案する。

「この間の約束。絵の具は払うけど、昼食はおごってもらってから」
「え？」

「そろそろお腹も減ったし、マックでも行こう？」

「あ、うん。わかった」

買い物後にランチ。無料で食べられるご飯はおいしくて、ただちよつと遠慮したけど、気楽なせいか会話も弾んだのだった。

どこまでも高く澄みわたる空の上を、雲がすべって行く。

1時間をもらって、私たちは紙を広げていた。

絵の具は十分にある。見開きをつかって掲載される予定の白紙に、これから新しい命の息吹が吹き込まれようとしていた。

全員がひと筆ずつ、奇跡を刻んでいくのだ。花でも、幹でも、土でも、好きなものを描いてくれればいい。やり直しはいくらでもき

くのだ。だから思い切ってほしい、と私は言った。

「えーと、出席番号順にすると私が最初なので、先陣を切らせてもらいます」

私の手がいちばん震えていたかもしれない。どうしてこんなに緊張しているんだろう。

筆をとる。水は少なめ。ざっくりといくのだ。

新品の絵の具は遠慮なく使える。私はピンク色を紙の上部に塗りとくった。桜の花が満開になるように、鮮やかに咲き誇れるように。

卒業式では仰げば尊しを歌うのが王道らしいけど、私の学校では流行りのJ・POPを合唱した。卒業ソングというやつだ。歌詞が覚えやすいのが利点だった。

半分くらいの生徒が泣いていた。私ももらい泣きしてしまった。ええいああ君からもらい泣き。

ふたりぼっちじゃなかったけど、卒業式という特殊な空間は魔力を秘めているみたいだ。日常の断片が泡のように浮かんで消えていく。まるで走馬灯みたいに。

「先生、今までありがとうございました」

北条が花束を、高峰はプレゼントを担任に渡していた。よくあるサプライズというやつで、クラス委員が計画したやつだ。ありきたりだったけど、それでいいのかもしれない。

魔力は雪のように全てを包み込んで、なんでもかんでも感動的に彩っていた。

私たちの作った絵は、それはそれは芸術性のかけらもない作品になってしまった。どういうわけか青や緑が混じっていたり、枝の方向も幹の太さも適当なのだ。私の一筆目はいやに目立ってしまい、浮きまくっていたが、それも許せる気がした。

担任の老人でさえも愛おしく思える。無事に定年を迎えられますように。交通事故などにあいませんように。そんなことを願う私がいた。

「ねえ」と呼びかけられる。

恒例の寄せ書きコーナー。

そこに記されたいくつかの無意味なコメントと、へたくそなサイン。私もあげたりもらったりしながら、白いページが埋まっていくのを楽しんでいた。

これがきつと、将来の宝物になる。そう信じ、いつもよりテンションを倍くらいにしてまるで選挙活動のようにクラスメイトたちを遊説した。

そんな風に身を任せる時間は春風に流される白雲のように早くてもつたないような気がした。

家でゴロゴロする1日も、感涙にむせぶ半日も、同じだけの時間が過ぎていくのだ。なんだか不公平。楽しいときほどあつという間に過ぎていくなんで、神様は一体何を思っただろうか。

「秋島」と肩越しに神崎が呼びかけてきた。

「なに？」と私は返す。

すでに『卒アルの同志へ。GOOD JOB!』というメッセージは書いてある。もちろん神崎からの分も受け取った。

「ちよつと時間いいかな」

そう言う神崎の表情はいやに不自然で、私は言われるがままに校庭の桜のもとへ足を進めた。

喧騒から少し離れると、そこだけ別の時間が流れているみたいだった。たった一輪だけ花をつけた桜の木。私たちのアルバムとはかけ離れた姿だったけど、それは確かに桜だった。

神崎の緊張が私にまで伝わってきそうので、ずっとその儂げな一輪を眺めていた。

私だつていちおう女子中学生なのだ。このシチュエーションが何を意味しているのかくらい、理解しているつもりだ。でも恋愛なんて不慣れな私はどうしたらいいのか分からなくて、戸惑っていた。

「あのさ」

神崎が切り出したのは、1分くらいの沈黙の後だった。

「うん」

「おれさ、これで中学卒業だから言っておくけど」

そこで言葉を切る。ああじれつたい。まるで拷問みたいな緊張感だ。

私は飛び出しそうなくらい激しく鼓動している心臓の音を感じながら、次の言葉を待つ。聞き逃さないように、耳をすませて。

「秋島のこと、好きだよ」

心の準備はできていた。はずだったのに、実際に聞くとそれはまったく違う響きを持った言葉に変わっていた。

なんだってこんな乙女チックな気分になるんだ。どうしてか、泣きそうだった。

「だから……その、付き合ってほしい」

神崎は顔をそむけている。そのほうが都合がよかった。きっと私の顔も、真っ赤になっていただろうから。

風が吹いて、スカートがはためく。この制服を着るのも今日で最後なのだ。もうすぐ高校生。

いろんなことが非現実的だ。

痛いほどリアルなのに、まるで夢のなかで物語を紡いでいるような気分。

どんどん自分がわからなくなってくる。けれど確かに1つの感情がせりあげてきて、それはゆっくりと口にたどり着いた。

「うん」と私は言った。

私は空を見上げていた。

中学生でなくなっただけからまだ1週間しかたっていないけど、桜は満開となり、空は青くなった。

春なのだ。いろんなものがはじまり、そして終わる季節。

私は色彩を強める空気をいっぱい浴びながら歩いていた。今日は初デートなのだ。足取り軽く進む背中、うぐいすが春を告げて

いた。

(後書き)

なんとか桜の咲いているうちに間に合わせることができました。

家からさくら眺めていると、なんだか無性に桜をテーマにした小説が書きたくなるのです。

きつとそれも春の一部なんでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6592k/>

大きな桜の木の下で

2010年10月8日15時28分発行